

中島広足往来抄(七)

白石, 良夫
文部省教科書調査官

<https://doi.org/10.15017/10463>

出版情報 : 文献探究. 16, pp.48-52, 1985-09-25. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :

中島広足往来抄(七)

白石良夫

〔四十(承前)〕榎林公足・猪股久隆・西紀磨・近藤光輔

岡部春平・みす子・淡江加津磨・名村某

彭城秋平・陸品三・柘植茂夏・西村気風

伊奈御橋・青木永章・紫福寺・若杉某

井上清磨・大津山某・いとにや・中島広

行・松本富久・来照寺

〔四十七〕榎林公足・猪股久隆・西紀磨・近藤光輔・岡部春平・みす子

十八日、公足・久隆にともなはれて、うち／＼蘭館「あかえみ

しのやぢれる家」を見に行。(九才)

以下、オランダ屋敷の様子を記す。「其回の筆とれる司」の評屋にて談笑したあと、役人の話所に寄る。

さぶらひ所めく所にいたれば、紀まろ、けふのあづかりにてゐ

たり。こ、に人々も来あひてしはしやすらひ、ひるのかれいひ

なぞくらふ。さて、かへり「さ」に近藤光輔がりとふ。此人

はこ、に名高き歌人なるを、此ごろ筑前のくに、行し「て」、

きのふかへりしとせ、をりしも家にありて「酒肴てうじす、め

て」、さま／＼の物語す。(中略)あすの夕サリ春平がもとに

て歌よまんとて契る。かへさに、みす子がり立よりて其事をつ

ぐ。(九才九ウ)

「久隆」は猪股久隆。オランダ通辞。文政六年、オランダ詩を広足に訳させたことで著名。近藤光輔とはこの日、初対面である。本誌

第四号(三) 22 参照。

〔四十八〕みす子・近藤光輔

十九日、わりなきさはり出来て、けふのまともなまれり「か

へぬ」。其よし、みす子がり行てつぐる。ついでやがて物語し

て酒などたうぶ。(中略)夕つかた、光輔がり行て、けふのま

はりのことつげ「いひ」て、やがてきのふの名残の歌物語しつ

きぬるに、おもしろくをかき事かざりなし。(中略)此人、

歌のおもふきを得たる事、かねてきしにも、いとまされり、

(後略) (九ウ一〇オ)

〔四十九〕淡江加津磨・榎林公足

廿日、あるじ加津まろのあつらへにてのりとごことを書。また、

公足が家のこへるによりて、櫻屋の記をかき。(一〇オ)

〔五十〕榎林公足・名村某

廿一日、ひるのほど、公足来れり。日入がたより名村某をこひ

て、うちつれて某の楼にのぼりて、よふくるまであそびぬ。

(一〇オ)

〔五十一〕名村某。未詳。

〔五十二〕榎林公足・彭城秋平・岡部春平・名村某・陸品三

廿二日、公足がり行つるに、秋平来りぬ。やがてともなはれて、

から人のやぢれる家見に行。こもおなじくうち／＼秋平がはか

らひによれる也。(中略)陸品三とかいへるくすしの手をかき

人のざうしにいたりて見るに、其かける物を二ひら三ひらおこ

せぬ。(中略)かくて、かへさの道より春平に行あひて、名村某のもとに日ぐれがたまであそびてかへる。こよひは、何がし法師のもとにて『古今集』春平講すべきよなれば、(後略)

(一〇〇ウー一〇ウ)

陸品三、未詳。

22 榎林公足・名村某

廿三日、例の公足とひて、くれつかたより名村某に行て物語す。かへん、に公足が立よりつるに、こよひはぬまちとかいひて、人、なほおきぬたり。さまざまの物語にあかつきうちかうなりぬれば、やがて其家にやどりぬ。(一一オ)

23 榎林公足・名村某・柘植蔭夏

廿四日、猶此家においてものがたりす。よべ名村某に契り置つれば、ほとりの寺、見ありかんとて春平をまつに、くる、まできたら(こ)ず。さらば二人にてものせんとて、うちつれて出しかど、道に柘植某が立よりし(つる)に、をりしも茶といふもの、まとぬとかいひて、人、つどひぬたり。おのれはこのまぬげなれば、ことかたにぬたるに酒す、むれば、こ、ろゆくばかりのみて、公足が立行てやどりぬ。(後略)(一一オ)「柘植某」は、翌年の『後藤路日記』などにしばしば名前の出てくる柘植蔭夏であろうが、伝未詳。

24 榎林公足・西村気風・岡部春平・伊奈御楯

廿五日、猶、公足が家にありて、気風なども来りぬ。夕つかた此家とどの母なる人ことかたより来ぬるにこはれて、『源氏物語』の花宴巻を解ぬ。こよひは春平が家にて何がしの家とじむすめなどあまたつどひてここひくことありといへば、かへりぬ。『男女』と多くつどひ来り、御楯神主・公足・気風なども来ぬ。(後略)(一一ウ)

25 榎林公足・西村気風

廿六日、ひるつかたより公足が立ゆきて、ものがたりす。この公足の家で夕食に豚料理を出され、その脂濃さに広足は閉口している。

こよひも若紫の巻とこきぬ。気風とて一人来ぬ。やがて其家にやどりぬ(る)。(一一オ)

26 岡部春平・近藤光輔

廿七日、書ども取いで、よむ。夕つかた春平がかりかへりぬ(る)。此よは、光輔来りて歌よむ。かてて題三をまうけぬ。(一一オ)この夜の兼題は「浦時雨」「閑庭霜」「寄水恋」。当座の題は「屋上霰」「池水鳥」。広足はそれぞれ二首づつ詠む。

27 榎林公足・西紀麿

廿八日、公足が立行て、物語す(例の)『源氏物語』よむ。紀まろなどもきぬ。(一三ウ)

28 伊奈御楯・青木永章・みす子・柘植蔭夏・近藤光輔・榎林公足・崇福寺

廿九日、松のもり伊奈御楯が立りたりて物語す。又、青木丹液守が立りたる。夕つかた「又」みす子が立りたりて酒たうぶ。柘植某・近藤光輔もきたる。夕つかた崇福寺にあなる太釜を見に行。(中略)さて、公足がかりかへりぬるに、こよひは江戸と出雲と二人のくすしの、こ、にきぬるが、ちかき日に立かへる。うまのはなむけにとてあるじより酒す、めらる、日(よ)なれば、おのれも其むしろにつらなりて物語す(しつ)。(一一オ)

29 伊奈御楯・近藤光輔・岡部春平・若杉某

霜月朔日、夕つかたは松のもりにてわかれの酒たうぶ。おのれ三かの日にかへらんとのおうましなれば也。(中略)此夜は若

杵某のもとにて光輔・春平つどひて歌よむ。(後略)(一四ウ)
「松のもり」とは御楯が神主をしていた松森神社である。

30 楳林公足・近藤光輔・岡部春平・名村某

二日、公足来る(こひて)、夕つかたは光輔がり行て、春平と
よに歌よむ。(中略)歌ども講じはて、後、春平がとゞむべ
きよしのなければ、かきくらす。(中略)此よは名村某の家に
いたりてやどる。(一四ウ・一五オ)

31 名村某・楳林公足・岡部春平

三日、朝とく名村が家をいで、公足がり行。けふは出つらん(一)
出たらん(一)と定め置つる日なれど、雨ふればとゞまりぬ。夕つ
かたは春平が家にいたりて、やがてやどる。(後略)(一五オ)

32 楳林公足・岡部春平

四日、雪かきたれふれば、けふも出たらず。公足とひ来て物語
す。かたみに歌よむ(るついでに)、春平が、「まききくてか
へりばや、こまつおやのみこ、ろおもへばとめんすべなし」
といへるに、
とゞむめる心ふかさはしれ、どもまつらんおやそ(も)かつ
は(そ)恋しき、
春平・公足にいふ(ひかけぬ)

かたむろのつなねのたゞずこひもこんならのはやしのかげを
とめつ、
春平が家の名をつなねのかたむろといへばなりひ、公足が氏
を楳林といへばなり。(後略)(一五ウ)

33 近藤光輔・井上清磨・大津山某・猪股久隆・楳林公足・岡部春平

翌五日は薄日もさしはじめたので、昼ごろ思いきって出立することに決める。

人々来りてわかれさしむ。光輔・清まろ・大津山某・久隆等也。
公足・春平はおくりせんとして、ともに出たつ。(中略)日入ぬ
るほどに矢上のすくにつきぬ。公足がいないにて、いとにやと
いふにやどる。此よ歌よみかはす。(後略)(一六オ・一六ウ)

「大津山某」いかにや、未詳。

34 楳林公足・岡部春平・中島広行

六日、朝とくいでたつ。公足・春平、宿はづれなるかはらまで
おくり来る。(一六ウ)

二人に別れて、島原に向つて多比良まで行く。

なほたづねて平村の植木神主がりいたる。あるじはあらぬど、
妻なる人いで、ねもころにあるじす。(中略)あるじもかへり
来てさまぐの物語す。(後略)(一ハオ・一ハウ)

「植木神主」はのちの中島広行。この度の長崎行きは往路にも立寄
つたことは既述。

35 中島広行・松本富久

あくる七日は熊本への船出であるが、折悪く船便がなかった。広行
の奔走にて、長洲から来ている釣舟が明日出発というのを聞いて、
便乗してもらうことになる。

とかくするほど松本富久来りぬ。此人は、先つとひ今は吾国高
瀬のまことにすみてはやくよりしれる人なるを、近きころはまた
故郷にかへりぬたる。おのれが来つるよし、神主せうそこしつ
れば、こみき、た(る)「つる」一せ。(一九ウ)

36 来照寺

翌八日の午まえ長洲に着く。そこから熊本めざして行くのであるが、
途中にて日暮れとなる。

日入かたになりければ、よるの山路はいと、まどひぬべくや
とて、橋のまことなる来照寺にやどりぬ。(後略)(二一オ)

翌日の昼ごろ、我家に帰る。
 紀行本文は十一月九日「家につきぬ」で終るのであるが、そのあと四丁ほどを、此日記に書もらし「た歌文を記す。」

【索引】

ア 青木永古

〔四十〕12

青木永章

〔三〕〔四十一〕12 28

あかしや

〔四十一〕6 7

秋田姓吉

〔三十六〕

阿蘇惟馨

〔三十一〕〔二十一〕

阿蘇惟教

〔二十一〕

細田屋

〔四十一〕2

イ 池千別

〔三〕39

石川執

〔三十三〕

井芹某

〔三〕15

伊藤常香

〔四十〕13 16

いとにや

〔四十〕33

伊奈御楯

〔四十〕8 13 24 28 29

井上清磨

〔四十〕9 33

猪股久茂

〔四十〕17 33

芋栗園

〔三〕11

ウ 上野光考

〔三〕32

内海真道

〔三〕27

衛藤若蔵

〔四十〕13

衛藤蟠谷

〔二十一〕

大石真磨

〔三〕26 33

オ 大津山某

〔四十〕33

岡部春平

〔三〕22 23 27 37 44
 〔三〕31 32 33 34
 〔三〕8
 〔四十〕13
 〔三〕45
 〔三〕2
 〔三〕22 40
 〔三〕17 18 26 28 29 30 33
 〔四十一〕6 9 10 21
 〔三〕16
 〔四十〕5 6
 〔三〕13
 〔四十〕5
 〔三〕17
 〔三〕9

岡松某

〔三〕8

小川某

〔四十〕13

河上健雄

〔三〕3 46

祇園社

〔四十一〕13

北島清之助

〔三〕45

木山直秋

〔三〕2

近藤光輔

〔三〕22 40
 〔三〕17 18 26 28 29 30 33

斎藤彦磨

〔二十五〕

彭城秋平

〔四十一〕6 9 10 21

坂本秋御

〔三十八〕

佐佐木弘綱

〔三十五〕〔三十六〕

波江加津磨

〔四十〕5 19

浄土寺

〔三〕16

聖福寺

〔四十〕6

浄妙院某法師

〔三〕13

深宗寺

〔四十〕5

杉谷行直

〔三十一〕

するがや

〔四十〕13

清家堅庭

〔三十八〕〔三十九〕

清水寺

〔四十〕13

崇福寺

〔四十〕28

高岡某

〔三〕38

高本宗深

〔三〕7

竹林某

〔三〕17

知足寺

〔三〕9

ツ	柘植露夏	(四十)	23	28
ト	吐月亭	(三)	20	31
	森広淵	(三)	37	(四十)
			1	2
ナ	中島広行	(二十七)	(四十)	3
			4	34
			35	
	長瀬真幸	(三)	18	30
			42	(四)
			(五)	(六)
			(七)	
		(八)	(九)	(十)
			(十一)	(十二)
		(十三)	(十四)	(十五)
			(十六)	(十七)
		(十八)	(十九)	(二十)
			(三十二)	
		(二十三)		
		(四十)	20	21
			22	23
			24	25
			26	27
			28	29
			30	31
			32	33
			34	
		(三)	22	(四十)
			5	14
			15	16
			17	19
			20	21
			22	23
			24	25
			26	27
			28	29
			30	31
			32	33
			34	
		(四)	(八)	(十二)
			(十三)	(十八)
		(二十)	(二十四)	(二十九)
			(三十)	
		(三十一)		
		(四十)	9	14
			15	17
			24	25
		(四十)	10	14
			15	24
			25	
		(三)	43	45
		(三十四)		
		(四十)	6	
		(四十)	13	
		(三)	13	
		(十五)		
		(四十)	15	
		(三)	45	

ホ	本間素当	(三)	6	10
			14	24
			25	28
			29	36
			41	45
		(二十四)		
マ	松本富久	(四十)	35	
		(三十七)		
ミ	峯崎	(三)	23	(四十)
			5	16
			17	18
			28	
		(三)	12	
		(一)	(三)	
モ	本居大平	(三十二)		
ヤ	山本三春	(三)	4	47
			(二十六)	(四十)
			3	
ヨ	横田敬正	(三)	5	49
		(三)	47	
		(三)	49	
		(三)	47	
		(四十)	36	
		(四十)	21	
		(三)	1	15
			21	31
			34	48
			(二十二)	
		(三)	19	

— 文部省教科書調査官 —